松島に於て芭蕉翁を読む

北村透谷

青空文庫

余が松島に入りたるは、四月十日の夜なりき。「奥の細道」に記する所を見れば松尾桃青翁が松島に入りたる、明治と元禄との差別こそあれ、同じく四月十日の午の刻近くなりしとなり。余が此の北奥の洞庭西湖に軽鞋を踏入れし時は、風すさび樹鳴り物凄き心地せられて、仲々に外面に出でゝ島の夜景を眺むべき様もなかりき。然れどもわれ既に扶桑衆美の勝地にあり。わが遊魂いかでか飄乎としてそゝり出で、以て霊境の美神と相通化せざるを得んや。

寝床われを呑み、睡眠われを無何有郷に抱き去らんとす。然れ雖われは生命ある霊景と相契和しつゝあるなり。枕頭の燈火、誰が為に広室を守るぞ。憫むべし、燈火は客を守るべき職に忠信にして、客は臥中にあれども既に無きを知らざるなり。燈火よ、客の魂は魄となりしかならざるか、飛遊して室中には留らず、女何すれぞ守るべき客ありと想ふや。

明また滅。滅又明。此際燈火はわれを愚弄する者の如し。燈火われを愚弄するか、われ燈火を愚弄するか。人生われを愚弄するか、われ人生を愚弄するか。自然われを欺くか、われ自然を欺くか。美術われを眩するか、われ美術を眩するか。韻。美。是等の者われを毒するか、われ是等の者を毒するか。詩。文。是等の者果して魔か、是等の者果して実か。

燈火再び晃々たり。われ之を悪くむ。内界の紛擾せる時に、われは寧ろ外界の諸識別を遠けて、暗黒と寂寞とを迎ふるの念あり。内界に鑿入する事深くして、外界の地層を没却するは自然なり。内界は悲恋を醸すの塲なる事を知りながら、われは其悲恋に近より、其悲恋に刺されん事を楽しむ心あるを奈何せむ。手を伸べて燈を揺き消せば、今までは松の軒に佇み居たる小鬼大鬼共哄々と笑ひ興じて、わが広間を填むる迄に入り来れり。而してわれは一々彼等を迎接せざりしかども、半醒半睡の間に彼儕の相貌の梗概を認識せり。

小鬼大鬼われを囲めり。然れども彼等は悉く暴戻悪逆なる者のみにあらず。悉く兇横なる暴威を逞うする者のみならず。中にはわが枕頭に来つて幼稚なる遊戯をなしつ禧笑する者もあるなり。何となく心重くなりたれば夜具の袖を挙げて一たび払ふに、大鬼小鬼其影を留めず消え失せぬ。少時にして喧笑放語傍若無人なる事、前の如し。余りにうるさくなりたれば枕を蹴つて立上り、一隅の円柱に倚つて無言するに、大小の鬼儕再び来らず。静かに思へば、鬼の形しけるは我身を纏ふ百八煩悩の現躰なりける。

静坐稍久し、無言の妙漸く熟す。暗寂の好味将に佳境に進まんとする時、破笠弊衣の一老叟わが前に顕はれぬ。われ依ほ無言なり。彼も唇を結びて物言はず。

彼は無言にして我が前を過ぎぬ。暫らくして其形影を見失ひぬ。彼は無言にして来り、無言にして去れり。然はあれども彼の無言こそは、我に対して絶高の雄弁なりしなれ。知る人は知らむ、桃青翁松島に遊びて句を成さずして西帰せしを。而して我を蓋ひし暗の幕は、我をして明らかに桃青翁を見るの便を与へたり。

怪しくも余は松島を冥想するの念よりも、一句を成さず西帰せし蕉翁の無言を読むの楽みに耽りたり。古へより名山名水は詩客文士の至宝なり、生命なり。然れども造化の秘蔵なる名山名水は往々にして、韻高からず調備はらざる文士の為めに其粋美を失却する事あるを免かれず。

飄遊は吾性なり。飄遊せざれば吾性は完からざるが如き感あり。

天地粋あり、山水美あり、造化之を包みて景勝の地に於て其一端を露はすなり。詩性ある者が景勝の地に来りて、神動き気躍るは至当の理なり、然れども景勝の地に僅に造化が包裡する粋美の一端なる事を知ば、景勝其自身に対する観念は甚だ大ならずして、景勝を通じ風光を貫いて造化の秘蔵に進み、其粋美を領得するは豈詩人の職にあらずや。如何にして造化の秘蔵に進み、粋美を縦にすることを得む、如何にして俗韻を脱し、高邁なる逸興を楽むを得む。請ふ、共に無言なる蕉翁に聴む。

「美」は遂に説明し尽す能はざる者なり。「美」は肉眼の軽佻なる判断によりて凡人に誤解せらるゝと同じく、雄大なる詩人哲学者をも眩惑しつゝある者なり。至妙なる絵画、能く人を妖魅す、然れども絵画の妙工も一種の妖魅力に過ぎざるを奈何せむ。吾人真如を捕捉すと思ふ時に、真如の燦然たる光は真如を惑はし去る。「美」を観るの眼も亦た斯の如し、正面に立つて「美」を観る事は雲のかゝりたる時の外はかなはず。迷宮の中にあつて「美」の所在を争ひ、右に走り左に馳せ、東に疲れ西に憊るゝ者、比々皆な是なり。韻士は力を籠めて韻致を探り、哲学者は思ひを凝らして析解を試むるも、迷宮の迷宮たるは始めより今に至るまで大に変るところはあらざらむ。

然れども迷宮と知つて迷宮に入るは文士の楽しむところにして、迷宮に入る事能はざるは文士の悲しむ所なり。古へより文士の勝景を探る者未だ迷宮に入らざるに、未だ妖魅を受けざるに、未だ造化の秘蔵に近かざるに、先づ筆管を握つて秀句を吐かんとする者多し。造化に対して礼を失ふ者と云ふべし。彼等は彫琢したる巧句を得べし、然れども妖魅せられざる前の巧句は人工なり、安んぞ神霊に動かされたる天工の奇句を咏出する事を得んや。ひとり探景の詩文のみに就きて云ふにあらず、凡ての文章が神に入ると神に入らざるとは、即ち此境にあり。古来の大作名著が神に入れるは、孰れ神霊に動かさるゝを待ちて筆を握らざる者のあるべき。一たび妖魅せらるゝは、蓋し後に澄清なる識別を得るの始めなるべけれ。

勝景は多少のインスピレイシヨンを何人にも与ふる者なり。故に勝景は如何なる田夫野郎をも詩気を帯びて逍遙する者とならしむるなり。然るに所謂詩客なる者多くは、勝景を以て詩を成さゞる可らざる所と思ふ。勝景をして自然に詩を作らしめず、自ら強ひて詩を造らんとす。こは実に設題して歌を造る歌人の悪風と共に日東の陋習なり。彼等をして造詩家たらしむるも、詩人たらしめざるもの茲に存す。彼等をして作調家たらしむるも、入神詩家たらしめざる者、茲に存す。而して此事ひとり景勝を咏ずる詩人に限るにあらず、人間の運命を極めんとする近代の意味に於いての文学家が、筆に役せられて文の神を失ふも、皆此理に外ならず。試に思へ、当年蕉翁の俳句を作らざる可らざるは、今日の文人が文章を捏造せざる可らざるよりも甚しかりしを。況んや扶桑第一の好風に遊びて、一句を作さずして帰りし事、如何許の恥辱にてやありけむ。然るも、凡庸の作調家が為すこと能はざる所を蕉翁は為せり。蕉翁が余の前にひろがれる一巻の書なること、是を以てなり。

われ常に謂へらく、絶大の景色は文字を殺す者なりと。然るにわれ新に悟るところあり、即ち絶大の景色は独り文字を殺すのみにあらずして、「我」をも没了する者なる事なり。絶大の景色に対する時に詞句全く尽るは、即ち「我」の全部既に没了し去れ、恍惚としてわが此にあるか、彼にあるかを知らずなり行くなり。彼は我を

偸み去るなり、否、我は彼に随ひ行くなり。玄々不識の中にわれは「我」を失ふなり。而して我も凡ての物も一に帰し、広大なる一が凡てを占領す。無差別となり、虚無となり、糢糊として踪跡すべからざる者となるなり。澹乎たり、廖廓たり。広大なる一は不繋の舟の如し、誰れか能く控縛する事を得んや。こゝに至れば詩歌なく、景色なく、何を我、何を彼と見分る術なきなり、之を冥交と曰ひ、契合とも号るなれ。

冥交契合の長短は、霊韻を享くるの多少なり。霊韻を享くるの多少は、後に産出すべき詩歌の霊不霊なり。冥交契合の長き時は、自ら山川草木の中に己れと同様の生命を認め来つて、一条の万有的精神を遠暢し、唯一の裡に円成せる真美を認め、われ彼れが一部分か、彼れわれが一部分か、と疑ふ迄に風光の中に己れを箝入し得るなり。この時に当つて句を求むるも得べからず。作調家は遠く離れたり。詩人は斯る境界にあつて、句なきを甘んずべし。蕉翁が松島に遊びて句なかりしは、果して余が読むところの如くなりしか、或は非か。一巻余が為には善知識なり、説の当非は暫らく措きて、余が松洲に泊せし一夜の感慨は斯くの如し。家に帰へりて「奥の細道」を閲するに、蕉翁は左の如く松島に於て誌せり。

ちはや振神のむかし大山つみのなせる業にや造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を尽さむ。

（明治二十五年四月）

青空文庫情報

底本：「現代日本文學大系　6　北村透谷・山路愛山集」筑摩書房
1969（昭和44）年6月5日初版第1刷発行
1985（昭和60）年11月10日初版第15刷発行
初出：「女學雜誌　三一 四號」女學雜誌社
1892（明治25）年4月23日
入力：kamille
校正：鈴木厚司
2008年1月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

松島に於て芭蕉翁を読む

北村透谷

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/